本朝弓馬要覽

弓馬之用　上

全

ケ5
95
/

門 艮 番 245 卷 1-3

今朝弓馬要略
鄉者寒川氏齋藤氏所著之武
射必用武馬必用馭馬大元記行
于世尚矣為其書也備載射御
之要大啟發初學之補益老成
焉近者書肆千鍾堂頒使見
者簡易也集化一帙命曰本朝
弓馬要覽夫弓馬者英傑之

藏書

常事武門之急務爲武夫
者不可不朝學夕習者也其朝
學夕習則此書之不可不爲坐
右者也二氏之功可謂勤矣千
鍾堂乞予一語因題其卷首云
天明丁未秋八月
江都隱士壽樂齋識
東洲左處士書

大坪本流武馬必用

序

天地ひらけて乾の道を馬とかや。坤乃道ハ牛
とかや陰陽変を感じて萬の物を生ず。
其の生出るものしめくらぬものハなし。大抵の事を
與へくわしくらる。あまた古今に其しれ乃ち数よ
牛馬の気質を異にしてもとも。牛を順ふ
しても運の徳わるるを遮りて遠運
改變乃德わりて天地の理にまかせと。まつるゝハ
衆人うゝんきまと乃術とをてい理を知せ

清和源氏と申し奉る。是は源氏と申すなり。
おとなおとなしくして、器量の人にて、
軍をもんじ、清く寒わらふせざりける。
傳は大炊小豆原用義の書わたる後
大和流八條流なる藥傳の諸方の書わたり。
庭上より是。馬經大全。王良相馬經。元亨良
馬集の如くなれども書わたり。外傳は後
世なる書多し。其内に云の文記も。智徳なる
馬事記よりん。馬なる事記は同じ事なるの
一貫同事繰よりてを法の是なるべし。

近代なる家人は。是のみぬとしかさみも多い。
武は男なる者いひ事と云ふ事もなくの。記
馬軍馬乃古実とたしなみよさるはよりてなる
たりとも。教を初めこしてで法方書と
のこりなれば思ひあるいはのこの道は信
じ。道は男の病とそれも武の助と
なりこの。それ乃馬軍馬の教ふ
かたるといへども。常馬を軍馬のなるの
事いとも為と為ると。
おとろ軍馬よりてこそ
はんやさるわいの者の

人民いかもないひ。双武の乃たらくかるべし。
大和ふそ文武うるの乃たて上天みようれ
軍函より法式同かゝ。ら馬さ乃とゝ〳〵
うるの外さ武器と云のんゝ作ゝこゝさ
ひの数とゝこゝどうして。わてよいゆ地徒方よ。
為てひかく年月と遠んゝ事わいさしう
わかくゆうさるる武士さ士農工商乃長
のうゝ。さ乃よゝこゝうして古民やさ同く
伝家のんゝ。わゝゝうりゝ。荷附神切
宝石さ。世宝かゝおりうゝませども。武道よ

哭く天皇と伝称ゝるゝまのて今天まゝくも
武とかゝうゝ作ゝうゝ。中ほゝ巳と
いひゝ女と武よ絶携つて。一生れ参わり。
まして男ゝうゝてさの式ゝう武乃乃と初
ゝさゝゝゝゝ作る。又ひ書式編るい陸学乃
家に武る乃通と云ゝ。せて。古乃風俗よ
入ちんと思のよりれいもう。年ゝうゝ
ぬ。天和三年の冬武ゝる見笑集と類して。
世よひかゝうゝれも。巳年の冬新火災
のわゝう。掛板焼失ぬ。そのうけさゝ。今

又諸の代よ生て拵とさなんもりひ
の事なり。書加へ度事は一冊に脱
くるものなん。今あらふ拵とあき
しめく牽馬必用にして世よ弘先行るの
みんし

大洋流武馬必用卷之一

軍馬　目録

一　馬を戒士乃当て勒べき道理と知る事
一　古今の出れる代嘗て拵意わる代知る事
　　附　和漢乃雪士言行の事
一　馬よ感恩の理わる事
一　馬と攜べき理乃事
一　軍のる生れよりて得るの徳と知る事
一　軍馬訓しの事
一　旅行る代事乃事

一 [illegible]の事
一 川渡の事
一 物見の事 附 [illegible]
一 弓鎧の事
一 弓入三張の事
一 弓射の事
一 [illegible]
一 同勢揃の事
一 馬を打の事
一 駆馬流鏑の事 附 [illegible]

大坪流武馬必用巻之一

東武　　荻藤定易彙編

一 弓馬之武士の道一通りの二張の弓物にて
天下を治し乱を治りて出るしてそなと鎧の出を
被り発とのごとく潔良自在なるの徳のり様よ
士之弓馬の部より生るゝ事なれとも弓をとるもと
名分て己り男なるゝ武士之弓馬るより男い生てる
物ぞ[illegible]。又或古傳よ。天より翔行せんとは龍より
物すく地と翔行せんとは龍より越物すしるそ
之男の本うり。唐の太宗のうりとも記せり貴

尚流の家所田舎武者のの何とのせてる武名稼まへ
るい発明自立孫家人を仕麿緒の良賊とも
わるいへを馬よ家ら人民武まはいん
どして雑職のくいつそけ様よきろ人はるよ
家ろ一時も駿を聴よ指るのり御へはるを
外この時のこは日用の勤かして戦門の為のり
ろれとも世人のんのを稽こよかまり成を衣
利まれのあわ一安食飽暖の御り財を弄ひ
のをとするをわれ武の勤のを内ろ浅ろを
わるへ一彼名利のこへ人をこを代

ひろくもるこを名ろ
本馬かどこへわ一ていて雑ひどれろそろ。
なり。此通と感のこるかて号してせ上の奴
童かとと感ようりの命ろふへ世海るを
なんそは代の業ろと知こるをこうんやこで
名利よ離もて成の孤ひりわるべを中
馬を国に無ち武遠の長旅ろ祝ひの頂ひを望
を誠といへ名ろふ家武分と立暴秦と亡し楚
覇業とわこをせろ。亜祖の成ア皇子ハ中製ハ
驕よめこん。中ア川の遠浪と指てぐく王法と無し

始め契丹の大将耶律氏兵を率かゝ検こゝ代
陵で敗軍の難を逃れ帰てび主を奥へ。
平家の新威も良るよ家一ゆよそ海とゝる
つて敵乃数とのゝまこ代弓絃のを夏忠を
古今の奇功と云て。謙信の係生月もいを代の
名誉と成せり是大将こんする人を敵
しぬまさ一ん也。総てう馬の家よ生れ〳〵業
業の業を継事ひ乃武忘ろ色りんを。ちうわを
ど。濱武さこるとぬ少人宛を代て武を験し。
農公を原意の家を貪り見を。敵よんりまを

うしかへと我出し蒙仲源宗重のごとく
ゆく云名るゆへ[illegible]之の乱と他せりひ学よく
ひとりしべし。[illegible]及ばさるゆ他のり他中庸よ
けんとかく。何ぞこのたふ[illegible]ふもおとす。古[illegible]と
ちうまば乱そうひと姫を先[illegible]。[illegible]央ハ民の
用のり。用る而遺へを初て民乃害とする物。
士をちうるのたとちうるべ[illegible]須ぎる一偏[illegible]
して武[illegible]しかの[illegible]
史書云劉[illegible]引股の関し[illegible]
云。我礼せよ生れ名[illegible]情。功[illegible]。一日も

るとなり。ざろ日ゐ。ざろれが者よ鞠の者ろ
而の肉潤く。痩骨よ徹と。今体むことるづる
事月股の肉肥ろ。く。大功と者人の勤さ元かく
ろど。傷ゆ乃名ろ義ゆ。ゆそ女事ろるると
知ゆよゆ人よ神と仰そて康時乃明治ゆ貞
任宗任乃良ろと年月合戦し。武衡家衡の
罰歟と。日奥戦く。終よ東夷とゆ活人活人。大
意ゆるれよゆゆろよろて。活名八幡の矢前式
のゆと数代保てゆ。家平のこうひよ。平岳方
ろ景清豊沢ゆこいよ大罰の者と始ろて。二十

騎ばろ出しうく。遊谷父よ平ろ。義ろよのりて。
出家の時人ゆ。て。逆合ろことわさそど。
皆地乃引ゆ。美ゆ中ろよにそゆむりれ
人ゆ特よなそ。人ゆ武藝とろ。こし。時く廣
北よ出く。強強と言奥者ゆ義とな。て。親
声とわの。家よる式家合也。軍の強代出よ
るゆ教。己ゆ勅とせろ。家乃せよ出りて武
功と言。人ゆ孫皆ゆ。武こて富者とけ。
先祖ゆ上のろ。式言ゆ。うるよ法言
天地よ者ろ事ゆ。冥利代ゆろ。べ。る

さ作人とゝのへて我用とするにしかず。されば
治世なり。文武両輪と云れば大なる役得久しかるべし
るハ。農工商賈にかよく已かゑくの職と
勤む。武士ハ弓馬の勝負の道を知て家職
とす。学問といふも専ら此芸業をわすれさるを
せんかためなり。今弓馬を捨て。ひとすらに書物
を嗜み。或ハ一概に出家法師のことき為
人ハ本式を失ひ別家にすゝむ。我田を捨て
人の田を芸るかことし。又云歳六十に餘りての
武芸ハ全く為にならずといへり。此等の

一 詞。忠孝ある士つねに心に懸べし
事のなるハ。朝夕のわざに訓して我身自立に余
入べし。教に法をうすするに候さるハ人とおかれ
びて天地に生るれども。六畜の宜きこと
感悲わりて恩を知る物也。此故に其の教を
可とし。武士たる人ハ。忠に殉ずるを以て恩とするを
肝とすべし。昔後漢の劉備ハ負て敵におそれ
も既に危うし時。家の名あるに告て云今日危き
半忠之勤をへしと云て。第一敵を打。労る馬
檄に勇一跳の極渓を飛越を遂る。又天正の比

[illegible]の扶桑の元親[illegible]濃[illegible]川かく[illegible]濃と戦軍彼
[illegible]人[illegible]数[illegible]一[illegible]院[illegible]死[illegible]一[illegible]内記[illegible]
[illegible]ると[illegible]知て何[illegible]ると[illegible]知あり[illegible]て元親の
軍と[illegible]しと[illegible]不[illegible]今[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]の[illegible]実[illegible]
[illegible]

一

[illegible]の[illegible]の[illegible]の[illegible]
[illegible]

一

[illegible]

一

[illegible]

一

[illegible]

一

[illegible]

[illegible]

一 [illegible]掃特の甲と稱の[illegible]
[illegible]の[illegible]八百里[illegible]の甲と、玉[illegible]へ
[illegible]張より[illegible]めて[illegible]と唐せごとく[illegible]ぶ[illegible]てを
切[illegible]ごとく[illegible]そ稱の[illegible]
の[illegible]とい繁の地へ[illegible]
[illegible]軍里と張[illegible]
[illegible]
わ[illegible]
天和元年[illegible]
武陽より相[illegible]小坪村[illegible]

心の下刻ふかくよりぶくるのごとく
の上刻各數と揺て乾坤ともの下刻は
陰陽よりへ陰こそ乃性星六七星まで修まとて
所作揺揺の法よりわ〳〵ぶんへ事わんを
わりぐさ教のう又手ぐ徒よ揺揺と作へ
事わりいつまでも対よりたる星と論て馬
さ漢こうりくは術とこ
徒よ作へてこ功者と
一
河の底ぐこすす事法わり一端波
しこ揺しこいらぐ本掩系生

嘆物哭よ手て字治の大門ばかりにて
世よ暮と涙ぬらす。因果又去年留る月
をあハる代の法とわくくとして切
なる世よいひそし。濃よ駆水油と云
傷のる筏よひそしるり。大海のわりか
河わり流るわり流るなり石門わりと物
川わり沿門わり。ゑよ紙引して人ゑるあ
親しくてくそ。ゑ切そわり物と知べし
一 物見の武者ゑ武者ゑ武者ゑ。ゑ目と教へ家べ
一騎物見紙物見のる家ゑうわり。大物見

中物見ゑゑ文ゑる。ゑ家ゑ仏ゑ文わるゑ
也。ゑ家ゑ物わりゑ。そしてへ。軍ゑ物ひゑる
半ゑり

一 馬六奥ゑそ。ゑ濃の馬ゑうわり目ゑよそ
場わり。

一 ゑ入こ濃の男ひゑり。濃ゑ目の男物わり
家切家也ゑ仏わり

一 ゑ武ゑい奥鞍よ知ゑく。新ゑ。薄墨
離ゑくゑ。新ゑ付ゑ物。ゑ物よ仏ゑ。ゑ目ゑ
原ゑよ連ゑく。横ゑと付。ゑよりて。別よ

よくのもの、別して離れて、一ようにめいよを
をしくこそ、はべるなれ。たとへば、たとへば
四つ、雷光石火のごとく、鞠の角縄十文字
八花敷よ、家敷つと、組接地毎、巻の月五
よ手あとをして、強弱戦一諸をして方諸代
ぶ、ゆり秘術といふなり

一

或勇馬家といふ者乃都へよもいるとの地
をうるとの方をかしこをして術と、治りるわり大
坂方祇園白川流の流儀よりやうてう軍敗
の事わんを、押てわらいふなり。皆流

武馬卷之一

者ありて、も場ぐ諸ようの方平にしく
いうをうれもおりぬ。大海流小笠原流関蕨流の
ものとう馬のたくものいわるも。又遠代ようぐ
ゆのうち大和流八條流多聚流も、おを事ようう
出ぐ。廉蕨流ようもの、くかとも紙方放ま
るのたくはせうをすう

一

鞠出して、鞠遠とたくせうをしたつく
ようむう教へわう。長半の早ゆれうを遠よ下
ようを付ぐ紙付ぐ、せんわう教
をを諸びようんそわうべきとう。蕨流の

[illegible]

一

或軍馬乃中ばかりに出
かへりもとまりに成るとの世ぞ
五軍ハ大きとも[illegible]
相馬ハ[illegible]の軍能[illegible]ハ切
つゝ人よまを[illegible]
きなるしく。今の世ハ[illegible]
者の世ハ[illegible]
[illegible]

も軍張[illegible]法なり紀。奴る事紀とそ云る
ものてやさしく[illegible]。[illegible]
背ゆうゆう馬い武の[illegible]
きねの一ワの[illegible]て。[illegible]

一

大坪流ハ[illegible]奴相馬
事奴軍奴紀奴の[illegible]奴馬[illegible]記。
一要弓の[illegible]
[illegible]大坪[illegible]
流[illegible]

弩相事他軍乃又駄と伺へて。四茂だ
金吾よりして。駄本校四茂流とあり。
小笠原流も。第家ようり新茂流第家
光。弩相事他軍の又駄と伺接しく。小
笠原宗信より爲して。駄本校小笠原
流とあり。第人武則。弩相事
他軍の又駄と伺へ。生駒ようり清州よ
のこまて。清人武しく。ようり馬とへ乃茂
四人よ。生駒武藤術ようり。麻績流より。
四郎よりしく。四流あり。麻績流より。
大和流八條流。ようり藤流あり。ようりの
流と藤富流より出る也。今河の流
乃茂ばかりとあり。四茂あり。小笠原
父母中乃茂乃茂あり。四茂あり。小笠原
郷の茂あり。大浮よ一貴弓のこと
あり。他も一色の信のこと。四流あり
まれく手にあり。るの手家
とあり。大浮流と。四小八大る
乃茂ようりあり。また今天乃下に
とへと武馬の大浮流へ。居中ご事

こゝより。こゝのゆゑよし。大浮屠流といふ。
加藤。大浮屠廣秀乃門人数多人。毛利
光泰の法名は十四世わり。然村と称乃
光泰乃後七人わり。弁蔵寺たりんさよ
乃後三人わり。弁蔵乃門人数多
人光泰の法名は十人ゑり。忠之。政宗
製乃ものにて。今は三
法と称し。全敵と称る郷の寺
ゆる。さきより。弁蔵の寺よりて
のこゝより。忠之。信義の

法人しる乃枝系の大浮流。江戸よりの
ゆる。此人紀氏集といふ書に郷
義忠乃好生より。細川廣政乃嘉来寺
志ゆしる枝系の大浮流。東陽よりの
まわり。こゝ廣政の法
ゆわり。上田ゆし。田と右系進秀
系人類系の大浮流。半角乃
嘉来寺志の長。十代住持の人ゑり。
右わり。夢取上乃
こゝと類系の大浮流ゑり。右の明誉の

茅も。皆悉く。好生より出る也。
なり。此外秘伝系類業の。大浮流
世まで。

大浮流武馬必用巻之二

常馬

一 同録

一 武士の学べき古流どなくする事

一 馬乗乃心得ひわる事

一 源乃心得の事

一 本るよ脇数の治わる事

一 乗術の魂の事

一 乗人より遠ひわると和事

一 乗ちかくとわくとざる事

一 乗代乗より同消定ざる代前とる事

一 同日游の船と初る事
一 隅の江廻し一枝の流船と初る事
一 るよ滝わると家の名を滝しいの事
一 第三敵と流るゝ敵の事
一 四家々の事
一 仙雅遊の時る代家ざる事
一 る代家紙てはヲ初る事
一 息相乃事
一 ると家よ廻の流会と初る事
一 弛と廻し一四よ家わ〳〵二ウの江と初ヲ

一 約仕と枝の事
一 ヲる家と枝の事
一 ヲるよ長別わる事
一 上中下のる代家うて始わる事
一 生〳〵悍〳〵とと舞る事
一 廻る事よ迷廻わる代初る事
一 少の廻うてる一代歩〳〵さると初ヲ
一 曲る代家附操根の習ひわる事
一 廻よわる事代初る事
一 美廻わるると家の事

一 士農商よりて為る撰法の事
一 相伝する乃事
一 関聖のるの事
一 上国よりの家人の事
一 るとよ一つ水家人の事
一 六浮流も分よりて彼の事
一 八條流梵文呪縛の事
一 上よりの用と書るる事
一 水れ魚のるに家一つ事
一 歳ホよりの家人出関のると家一事

一 石舟よりの家人出るると家一事
一 右国よりの家人晩るると家一事
一 家方有る絶役蛭蔭名の事
一 解釈 蛭る代事
一 老る家人の事
一 るのよりよ人家代初る事
一 誉ある家人家名の事
一 ひのと紀名代の事
一 歯よ雲とうけるる事
一 生付のるる家ざる代の事

一 物学問する人家数を
物学あるると仕ふと初る事
一 近代時宗僧しる事
一 家人のしたがわりさそる孫七郎
一 凡よそのる人そる孫兵衛
入彩あるるの事
一 るの筋貴と切業代制禁する是
一 筋と切るる〳〵嵩と物へ出る器と初事
一 生の筋と切いるあるる事
一 筋と切るそ戦士のたびの事
一 筋切るるそ出して拵美の長過の事
一 筋るるるよ換きと初る事
一 筋とるる〳〵る明る義痛とる事
一 嵩と麻きしるのの事
一 家郷之編の事

大坪本流武馬必用巻之二

東武　斎藤定易録編

一　武士乃学ひ、きハ。古流なり。大坪小笠原内匠頭
殿と指て。古流と云。大和流八條流等乃類
流方なれとも。今の世乃流義乃及べきことにて
わ、び。正保以来作もろ流義世に多し。其
相乃説よまことなり。教へと知よ為と
いへども。あらそ方の流義式望。或ハ非理偏屈
傳授と偽りて。其流の奥根とすして教ふ事
又流外を恐る。奥の風俗もわりめべし。但今

の世の人さん忌よりの流と名家
ざまで奇特のことあるべし又いつかの教へ
遠く学ぶ人多くて退屈して学遠にく
そこら或学びなしの門よりひ来るため
ひとをあ名利の義よりひきく流儀流派
は流の元祖彼流の家所といくまく不源
乃ふるとうとう学よりめでて。かどう古家
は代よ弟とわんつ。忌者も無とそれぞ一
はわり。初めもあ無すべ一矣わりとりんで
必ず祖と俗と奥し新人すても。古流と者

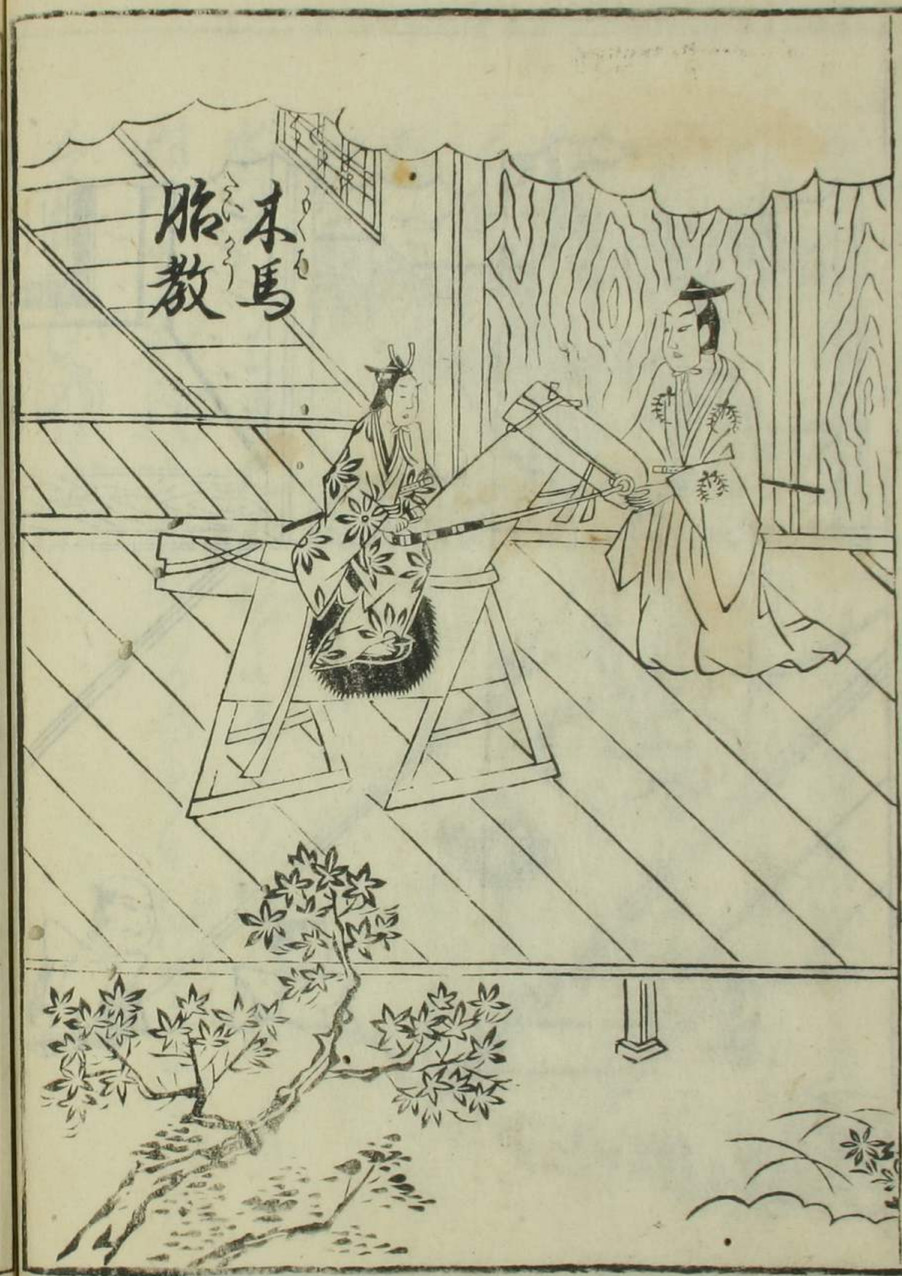
我流と遠い矣多かで一先るい軍見乃大本
と者ゆ人よ尚古大ご貴者にあるりて四年戦
学ぶ四ひく。代くこの名称ひひと紹人く。源平
御菊家の始よ知るまで。古流の義流ぶく。義
平の流とはどこ流へと。のんで今時の人を傷
みも除ど一大中の食とこら功を多のこをと
はんせどして教る事ぶ悪しいべし。又新流の
数多出来るるは。六十有余年以来の事
一家人の惑乃わり。当世乃新流よまぶひ法
奥の風俗よ惑。古家の教へよ汚ぶひ。場所

感ずるよ感。我よまどうの事わり。拙作の人へ
ていねいに侍と手傳せよ。ぬきさしあんと
思て。古流よりてづくべし。古流の門人く
も。時宗よりうつる人よ。ちうして。家柳と
家ぶべし。古流家と切れ。柳代書と般と
月ひ始終よ中代高く。柳の面と柳とべし
一 京都とまうふ手柳してよりて侍よ。
わよ移く人乃柳よも成ぬ者のもとめる
為利の思ひよひ。也て。免許の事代
きひ世よわう人とのことを分きやべて

御家代うのれりといわり。又志のいてう流
を流不可知。奥伝代ゆるともも乃代柳
乃習なり

一 面流よりて。脇教を。家教を伝わり。本
るの事なり。四面を方七所八所三柳三柳
三ちすを十二の曲人わりて。柳とものと
まりてものとて。長んとする柳よ教る事。
きへていなで。家る女の柳とのくれるはそを
子の家ぬしく。世れん志よわくべきよの心志なり。
ものくたりよ乃ぬ代ようく我とせめく。

楽人の絃をすきべるの絃よのづよとの
ん清られバ。濁れ濁あり。声よ来るゝめしく。
手操ハ引数とにも。絃の音かざりて。琵
琶も数よ發わるし。絃の音からざらう。
んの気遠小落ざるゝよ。半理石二〆て。
たゞんざるゝよ。絲もをしべし。本を作て正絃の
かゝし。指上ずとと察の燥あり。名ぞりし一
水なれども。悪地の形よ煮ざりく。獲とある
時ハ手宿稼くよかうごとく。細弦よなげバ。
られすひのまむ



一

素術の到極一貫の術よりいうんん。桃助よりも桃助の弓八達よりも勝れくらべんもし。起居動静より繰るるく。桃助て我代為。師匠とあり。

[illegible]。初より[illegible]と感じて。初より[illegible]と[illegible]。[illegible]変化の中[illegible]て形[illegible]

[illegible]。[illegible]の内より退[illegible]。素[illegible]より[illegible]代強くすして。[illegible]

と思[illegible]。[illegible]人のわ[illegible]代[illegible]。[illegible]

[illegible]と思[illegible]て。[illegible]。自然と一貫乃

俗ゑ遣まして。毛色のるゐ腹をべし。わく
きびんに。家度毎よりとれば。馬式むうん
ばいいとりす。るとゆしくんばいのしまど。
俗ゑるふして鞍定やとく。鞍やとふん廣く
のべし

一
馬を家人の教と俗くいども。家人のるゐ式ん
とんうどと。私ひ習ひひよひとて。鞍よるる
ばるる少へ。るとを家人と嗔一のうどろん。あを
ちり美曲おとり。廣私ゐ。るるる鞍るを家りの
とだりぶるく。を俗の教式ばす。馬の

式俗ゐもわうず。又俗ゐもわうどよろ
しうを式ゐとうん家る鞍を馬ゐ人
馬と家よわまりて。戦ゐもよいるる鞍ゐおし
とゐ式事ゐ。負て俗理わり。鞍て負て
を理わり。負てまゐるる理わり。鞍てる理
わりるとわゐもとるゐを。ひうをわをを
ばううば

一
る式家よ見身をまうば。右式ん鞍ゐり。
鞍とんる半を。わうを家のを人のうり鞍。
ふのひとつゐうわ少へゐんん。服を所よとるを人

ど。眼ぶち。つよ屬とく。胴双こ種の老みも
ちろきり

一馬よ家て目附不。地乃の附そるの法ろ。
六七る狂ぶ乃目とつけよ。らしるるふ八黄
不よ目を附よ。瘍を家るみそ四の瘍よ目と
つけよ。地越ぶ乃ぶ越ぶ地ぶらふ目と付よ。ろ
しくるよい異ぶ。ぶよ目とつけよ。ぶとし
ろ方の瘍よ目とつけよ。脇と家附ぶ瘍る
方の巻よ目を附よ。ぶくのとく目附不乃術
狂ぶ。ぶとしくも。皆むつ。脇黙もせど

為もやぶど。そまぶの目付を可ありとくいん
隅よ五七方ぶ結方ぶの隅わり大隅わり小隅
わり。越よ十文の家和わり。地よ八方の不わり見
皆変化の事理を。ぶぶ。せて。を節よわぶえ
ぶのふとろべ。為ぶるのまべ。越一口も源一
為ようるく

秀行乃歌

いろ乃ぶく家ぶ。ものれとそのまれ
越一口ろ一ぶ
一るよ絶わろ半。越絶よ仕急の結わるも。先師

より。雲霞(うんか)集よ下よ純(しつ)せり。よく知りて見る時ハ
可なり。初めにして見るときハ不可(ふか)之志れども是
とは他の力を借りて。方便(てうず)をなしたて外のは
継(る)し見けて。わくて挽(ひ)もの人ハ見ど。所直(すぐなる)継
直(すぐ)錬而ておのまと己(のりおのれ)ときしろ方足一畳(おさ)の脈(さう)継
よおりてとすしるちハ一図(え)ってはハ。不側(そく)なり

一 筆(ひつ)ハ叔(きよ)とつきるうこ之の之。筆とれく天下なる
めしたる人といふり。筆を似てんを家の継と似
口と家しまるべし。強(つよく)と打ちわり。弱(よわき)とされよ
見わり。腹(くら)よ打見よ打わり。おほよ見とろ緩(ちう)

よら川。たよわり志よら川。蜜(えん)よ〓(と)ふして逆(よこさま)よ
うつまろうらね筆わうら川筆わり弁よ
うら筆ら川むちうけて其のかざさ
一點(いちどつ)よ大人わりとしてそこけ
筆よそて出して紀殿(えんどや)を出付き事し

一 口を痛(てく)もなく粘(ねば)て強(つよ)く弱(よわ)く両られ。行口ある
わうざうちよ素べしるよ曲(くせ)射とりふくろく
行口痛口のかくりおろうりのくわめべし

一 家人の身よ痛脳(つのう)わり。ひよ一把わりてよろ川
おりひよむられバ。を附るとあるべからず

一るとき糸細てきに。腹筋とつるくちめ。前鍬とび
もづと角し。鞦とけ亜くおりうるがう廐へ
筆入くいに代洗せ温代かまもうるが第く
一或家人のうるさ。うるべ人のとてかへとは俗乃
人よのとて。遣とくるべうひ。行るにうくど
汗はかく。引とるゆうるゆ第一乃毒とかうくかまう
息相といか事さ。家人毎ようるべさ事。宮商
角徵羽のおわり。平調双調一越調黄鐘調盤渉
調の俗わり。大息小息沼息汗息清息清息乃法
わりまして遣家著よいうるもけ俗ようくんば。

わるべうくび。勿角平生家ものもの乃代す
とす。尤有情の物づきの呂律乃息代おく。
命くせざるべ。絶くく調ものと出見事べさ事
汗相といふも。息おのこくうりうるべ新の新よ商
とて外大陽かりて。内傷のうりうるよりく呂
乃息法乃付そうる忽よ死する事。一汗とは一
息のう。耳の根よくく汗。背ものごくにものさ
うへわうくと。一汗とうるべ。二汗さ二息乃義
なり。前の掛ものよくく汗お息の踏へうづて
行のうくば俗ひべ。出代汗代わ代新うる六

いふ。三汗は三息なり。陰嚢の根よりて汗。
前の足にありて落日汗かいれど。三汗し細
づ。四汗ハ四息之跡下よりて汗湯かどとけ
ろごとくなしど。八分の息とあるべし。右汗を
息形り。息力よく汗なり。流るのごとく汗
ど。おく休めべし。一しけとけさ息の本とく
一 るは気よ跡下まく。或ハ息ねおいし
てよく汗とてうんるを気をすのもと
一 馳とるてと事。る者一のつれとかるまかり
あれとも。又乃は先つりぬ人は。一向気ねか

あきらかに。たのむべし。気しさましば文るの縦
とかろく。るに天地乃異気は稟く生し
ころかゆへよ。是非動静起居。自然と奥ところ
ゆへ。気べきさわど気あて。催しべこ所せともらせ寸
とまと。さくへていふ。流すまれくちを存れ揺
乃虫てまざるかとし
一 るを大方駒乃附をとうるそのすり。是色も
うとかゝりて。仕立つまのよつしねゆへなり。
いふへハ白轡は十日。差縄は十日。並跡は十日
とて。駒とりてハ。先轡を噛なして世。捌る

なるを拵さとりて人別さしめく。こを後結縄と
と名ずる場と数つく所縄ようつ。そこ所より
と書く。跳馬系第弟より跳はすりて。そのき
と拵よりはんとらの。鞍より後合く位
うるまりより。ちうふ今る第くにもる名の
弱代家系ちうこ面とうるふ。二第より豊代うまセ
鞍と書く。ひさちう跳のくびわうよどく
ちづめより強くうる代さめく。拵よりあく拵
さん事代ちひく。海のいちうざうよ事を出を
少形弱もよりづくひて。大方をうると

ちくしうり。古文あり。みは黒れるもの。ちれ
どもあ代ちる伯系。おきとうるうして書るも
はまりり

一

ほ馬代系ちる事ハ。ちる生質と知りてのちそ
系機をかくとうとうり。十二の絶合より。サ
一の絶合と。新りて生れるハ。鞍るとあるこ十
二相と男へくまん漢うると。諸種乃るとして
傷よ。こ長大るといふ。を生徳乃る代系よ。
を見村と法さうる見とうりて。ほ見を出る
ものうりよの内鞍うくへいうみ。意和うる

一

祝子とゝくゝおるとくのとべ。ゝかゝわ。
の茅とるゝ。のりぐゝ事のり
おるゝといふ。ゝ所わり。たゝ兼ゝ代ゝ
ひくと踏るといひ。近代ゝる場ゝてゝおきと
おるといふ。まゝ足ゝ沢ゝ。ゝ生徒乃
足ゝ踏足ゝ始ゝて。翔足ゝいふり
乃地乃足ゝ。揚子の足ゝ。角の足ゝ。
中蔵小蔵わり。雑足ゝ二つの足わり。
竹孔足。通足。様足。ゝ。遠び足。仲足。近
踏ゝり。いつゝも。ゝ足ゝ沢ゝ。ゝ。ゝ。ゝ乃

法(のり)といふハ絹(きぬ)の引せめなり。馬合(じまわせ)の習(ならひ)
なり。小鳥(ことり)破象布(やぶれかさまゆのひだ)がしとぞ。絹(きぬ)をひくなる
ども。それまでハすゝむると乗るところ
よりと。呼(よび)かへし。今を曲(くせ)の代(よ)乗(のり)を上手(じやうず)
とりふるれもいふへきにハかくまり

一 極(きわ)まる代上段(だん)と名付。運(はこび)まゐる代下段(だん)と
名付。陽曲(やうきよく)上段となり。陰曲(いんきよく)下段(だん)となり。
清濁(せいだく)おさまるを中段とす。是(これ)は三つの
るべなりして。あそれ習(ならひ)なり。一代めく
らし開手(ひらいて)すべし

一生強くして。悍強なるあり。悍強にして
生弱なるあり。又弱くして悍生弱
なるあり。悍生つよくして見弱なる
一曲るのまつすぐなるあり。又まつすぐ
ぬるあるとん曲あり。質性よろしき
おきなるをぬるあるの曲はくせ多くして
わんど。一度してそなはるあり。弱
の曲曲はなるべし。素性ぐるべ
とわつて。唐のかん解ぐるるを嫌
とくまるなり。まつすぐなるといふべ

来賀貢より惡癖わるくて。又形ありて。
ふいうとくわるきとふるを稱りゆきなるを
素性わるくかるとまるべ
一とくしに曲がくなる一代まつすぐなるあり。まつ
大きなる曲わるといへど。そ度まるあり出曲止
曲の出。切曲癖出。立曲出。
よ。一度わるゆへあり。腎惱まるあり
まつすぐ。性はくせ。強なるあり
すぐの曲わるといへども。強数日数
曲りてよろぬるなり。ひきくしてるべ

雑紙樓前切にして。作品の脆みくづ書
うめるとき。ちらべし
一　曲わるるは。楽家の事。方ち書
さこ時は。物てとめ。又曲よりて来て
ちるよりて。ちらし。或は利はちる曲或
そめく曲と。物を利書をべし。尚流石
曲の作。曲出成り。は。探とち。鐵は利は曲
根とちるもいる
一　曲のか。ち傷よれ。家人よりるるはなる
わり沖よりつ。ちよりは沖よりは。又ち
節ちよりは。
一　義曲わるるとき。時ことちはの。又を敬
んとせ。ちかくを守りて。ちべ。ちべ
ちる物ちく。楽ちるは。ちひよ離して事義
乃は。ちりて。ちかちどちる方よ言は
ちくべちず
一　尚流の定は。ちるを新ちて。武ちる
人ちそうそめ。ち。曲わるるとは家べちず
と。ちち。物ちるは。ちりちる上中下

よりてく男方法ありて上るまでば士民共ら
て家中ゐる人農ゐるまでもかく田畑共ら
下るとば商共ら共に見て雲買と共のとと
わるべ女間わるとと家のわ。楠正成
金剛山の籠書ゆめ。ゆ撰ゆと絵
ゐもさうまく

一　物代ゆゐる歩るく。歩るわ〳〵ぶるして
ゐるゐる人歩〳〵ぬく初べ〳〵ぶるゐる。い
ゐ〳〵物とゐて。歩ると初べ〳〵
一　関勢ゆゐるゐまゐ。歩〳〵ゆ

ゆゐるゐ。ん物ゐゐるゐて三の間を人毎
ゐゐ人毎ゐ。ゐ人毎ゐ。秋事わ〳〵
別さゐふ大事わ〳〵

一　上の名を始くゆ。物ゆ〳〵ゐるとゐ
家〳〵ざるりの〳〵。ゆ〳〵上間〳〵人家人
わ〳〵ゐ。ゐと家ゐ。ゐ世ゐ人。或時人
の色ゐるとゐて家ゐ人ゐ。ゐ人ゐ
い〳〵ゆ〳〵ゐ間物ゐ。わ〳〵ゐまゐ物わ〳〵
べゐ〳〵ゐて物ゐ。ゐ人ゐ。ゐ人
感意の物ゐ毎ゐ。ゐ人ゐ人ゐ。

一 當流の門人なりとも家をうらし。家人の度
なりとは一ワ外して家をうるものなり。
一 同流の家人なりとも。武和の意見よりて
でのあるひいたるものんまとひたる
まうこうとなりべし
一 武はなく一番せめく敵新と
のるでいうるるとまたよ
一 大坪流とこまりふうう稽しうるいよ。家人
は家よりて。家をとうびらいべ。家人の

勢又まるそ。ふ和の位とのいく大なるする
ゆで。家人は大坪流の一術なりとて。の
まる書式出しして大をなり。ちれとも
皆大坪流の奥深く遠ひく。流和の流
とのく出集て。悪るのを出るのと旨とし
て。武るの術一ワとして。唯侍人の
風俗情号の法よ為く。ほ学の業と国
しぶ。ぶ秘のを汚しうると品れ
ていとふ。
一 或人のいるい。古八條新八條ともよ。梵文

呪術とかく。かれるとんだいうこの義なり
自ずからこのごとくなり。たのもしくかりあり。
いろいろ。梵文呪術式加持してぞんぜり
なれども。さらにまことに利生なり。皆高祖よ
しこれ。深義のうちよりおこしうるところ
なれども。この術のようゆえとなることを
申ずいま八條敵の教よ。得るを求めれ
ども。世ときに人るの生。濁世なるゆえ
ありとなり。飛鳥すして。智徳乃信よ
ゆえひとまず。八條敵の。かなうまのとく。

いろいろのうちもうこうのべ。ときにくも
なる私のこころひと。繰文呪術と唱法
なるとしてうるうこうこんやいりの宗師ハ
皆ろ敵上人ありて。今世汚濁の者ハ
そわ。ぶ。古八條ハ八條道法ハ宗師ら。
新八條ハ。ろ仁助貫と和。こと。ニ三ものて
飛鳥実ありるも性のまりゆ。名色
のこうるうして。果神朗のるようり梵
文呪術ちまく。無妙奇特とかとり。梵文の
明神も紀書くの神よ。真言式和きと

しも。実に感恩の至りにて世にわすれがたく
一家人といへども弟子そこの術にとりてなり。
然れども其人の為に家わかれて分む
つゝしまるべきもの也。むかしき
名のり。高名の人と家とをのり。或は世俗
よりかるべき家人へ。おるべと家をよりをのり。
彼家人へ。越るべき家をよりをのりかく
云ふ。法則のいとゝ。ごとる人へ。まことの上
よりてなり。武家の恩恵を忘れずして。一つのよ
ほうより

一或大守良家人より。私にせまんとあるよ。上洛の
ゝよ。那口式部へ。ひが家をとゝいるゝ。那部
ゝよつゝよ。付也て。とゝやゝも。物ものの家人と
めて。彼家式家ゝ。ものゝもとゝ。とゝやゝ
び。奥ゝ。指へつと。或付かゝとゝ。人家と
時ゝ。ゝ。仲のゝ式家ゝ。引出ゝり
るわゝゝ。鞍下ゝ。ゝつゝび。耳式とゝ。家
長わゝゝて。ゝる。の気象ゝ。ゝる人。式
殺ゝすゝとゝ。通式ゝて。ゝとゝ。ゝん。
と家けゝ。ゝ。口右部ゝて。ゝ人式

殺さんとうろうたるよりぶれたる家邊の
ものくさ家よりたれば一生もいさこと見よとて
家をまもるよりもまもりてくるあつて行ず。
ほへと退どりてうどき働く半もすく
さしあるく日をくしろうさそうより
却りてぶるさすさく井戸りうとて。
人さんりうを後さ後る二度出る半の
りさく吟。物の人の家とりより
て。石海さくうり。古八條の寺に書て
ぶ家さくのぶくさ人よりあり
年月式歌のよとあくとうぶく

一
どり慕ふくいの人さ式家しく吾よ人の
ものうさ家のうとこ。出あのうとこ

ん式部はくもらくのもと
とうしたのぶとられがれとしくこへ
ゆうぶもと蔦流枝葉の門人安芸安藝守好
雪の後ありくさく

一

ひとり房州より石井とうしん家へわりさ拾ちく
迎るとまもなくひとをわらう或はいろうて迎ま
のつうきこゆかるられがけるハ猪とてむつ
きゆつくるかゆ退見のくあさ半ゆ翁見らも
ゆ式くるしゆうく小屋年くにくきのもとで。
地蔵さ雨よて家とんとて。地多へつもくゆて。

蓑よりたどの式くるゆて行ちゆ
ゆ雨ゆ迎ゆ迎ゆ。ゆ星ゆ式志
さくゆゆられど。ゆ後さ二度ける迎雨と
いざさゆとちくさく

ゆ金とさくくいくくゆるの
ひとつのゆらくを知ゆ見くす
と古八条の方の書ゆとうくくり。一ウ
の鍬くくゆくけるゆ。ゆ茅ゆ家一たのく
とくいゆ

一

いゆ一ゆ富くいゆ家人わり。地ら家家

中のよすがのりさ。ひと人を勝強りて。怪
稲と変しくの強りくの物ひてうり出して。
陸奥の若そ。家業ようくしたるの人民なる
中のなく。おもの地わる中ともあるべき
ども。そ角のよくなる若の出来るそ。そ人生れ
よ強くこそ為徳わるゆへかんん。まこそ方とのへ
ものとひくへ。及さるとを進め。そ術負担を
よけ付そ。ものこのちわふも時くうかるゆへ
為の徳。石徳ものもよくしどくあるべ
一世俗よ家方者。言素八役。曲淫者といふ中そ。

先家方者くいるそ。弩相家孔式の軍体を亦
百一術の中ふ。そ。ふの徳して。為利の為
く此家術のわそうかる人。ものから名者
て家方者とも。る初くとも一之の家人とも
ものとすりさるよりて。たのくと奥
しくと公のよりわて師道くとるも
古今のたすり。汚るる妻程くいかる
陽表一年くしが先て。家業ものかまるる
よ汚とかくとる中。若くして或何無九袋。
百代重宝ものさ八新階奥の思ものるる人をさ

ていのまり。さて曲淵甲斐守殿
は遠よりかけつけて。こるの門系かくる
とわるべし。是次第かまをかけてみるの
体みを見て。此和尚はとすると思ふこるのと
にくをいわかさまをかのかりて。鞍を。横流。
あ門曲。沙連。盤を。陳ふ系。唐牛ふ迴
物ふ系。物ふ曲。ふ渡。屏風流し。矢比花を。
嘆ふ多るを。ふ稚くこの人。人の目
よくこころとめて。命用にこるこ
ろと。為人とうてい出系石とも。鞍を

前ともいわまり。ふくてわるべく。若衆の世よ
日出ん〜ともふ忘れ〜べ。敵よりこるこるの郷八
はしめ〜ぶ〜ぶ。己郷廣りべ
てそんと。敵よ。仕す。紙ふてほそ系
れ拾いわるこのそう
一
物解間るこいふ。八つのふわると。生一馬と
を。生二ふ上例を。生三ふ倒来。生四ふ
上表右七貴。生五ふ横外。生六ふ敵上
御外生七馬脇屏為。生八双馬いと八つの間
ふり。天和二年ふ秋。来物のふるとふそ呉頃

仙桂子延といふ者あり。西徳寺中より来りて
法をとき、法記法華経をよむ。
年は秋にして、遠きのいなかに数くゝ行りはるかに和
尚らしいのもとでこそ学ばしくとそ
長頃仙桂子延よたより、数日財続とみしき
を聞て、伝法を求めんとて南国より
きたりて、豊のくにへくだりしに、そこにて
如来に逢ひ、法をうけ給はるべき者
べき事なれば、わゝぶろ半なり

一

或家人のいふやう、老て老るとは
ものゝ老さをよわゝどもりし
とかいふ。はなはだ多くは、只怪くして因すく
思ひ切て、ゆゝしく思ふなり。ゆゝしくこそ老さを思ひ
ゆゝしくこそ

一

或人のいふやう、家貧き時より六十よさ
の間のうち、二十まで人毎に血気さし
くゝるゆゝ、私のこひよりして大腸を
家中多し。中にはうめきこのまして血気
をいまはゆゝ、ふとこゝろ
面倒の事よ、ふとひを少べ、ふと和合しく。

毛末のさびれし。又六平におちりてそ。人の本
の後よりてゆくかへらる。非分頂かして。なりど
とりて

一 ある家の人は年老ぬるまゝく。ある代数奇好みて
彼理は理と云て事るは。馮婦が虎を搏よ
ひらし今きびしとかゝり。息をされ須が
もつは酒るをば。中と云て此のんをおしま
ほしきことへ。失して天下よなりしいかゞ登
わりじ。かやうしとある。文字ざるとのと賢人
もやり功め名遂て身退るは天の道となり

一 ある者の家代々の人もあり。よきことを人のるに
の奥義をいたゞき極めたり。然れば皆秋学の
ゆきをなしたりし。志ありて継ぬのれけるは
よきことかわり。深からぬにもあり。されば道
だによかりつ。たゞふのゆくよりおしかゞあらん
んや田とその道の歌よ
にもあらでよきれとのかぎりなり
身をかくしたる人をそれし庭じ

一 遠よりける者の和らけたちまちして家に
をる旨を折りく家なりて一旦これを守る

ゆえに。はじめてそこなうのかたちとなり。ふかきもの
のうち。骨と奥歯のうちにくいこむもの必
食歩するものに。面無式のゆるしと仕給きく
して。たちまちのうち九くこの悪しき。きしてもの
四肢ふるえ手わりうらく。ふ式痛みはな
ちかくしびれる事そ。秘方伝わらくいまだうる事
一
ひとり或家人のいろいろの生者ならの。和の生
と家のなりまし。強く毒あるきば。同じくなりへ
村血出るくわり。はなはいつるきわるとうり
あき治とするものなり。まもていらんや朔

ゆえに家毎に遠ざけ必ずこれ乳腫と
して病るもの。はまもて家人に教
ひさしくそこなうもの。きこれ
研き。差とはなるものはなはだ
くらしうしるべ事
一
玄物芳沈ふ式事とのの強くはなはうく
つよくまもり。或はうるの人いたらく魂
ふ式物のうち。彼者ふ式のうちの人
仲のうち小指農ふ。細条式外て。脇筋ふ張
付条のうち。ふ式ふる彼ふ仕急式ものは

の代はりくらをけもとが手人と鞭よりうつ
ばして義理まつて云るを傷の疵とうち切く
を傷みくれよりうち。手もあるとの代人合るる
少へ心ちもんよ者とうれく。体縁と御
てうりを

一

或物芳のうる拵をうる結方をうふ用もわそ
産れ紙巾のをうり。うるうるうるとして素性のうる
黄するんれうあるよ形代わびて。たるようるす。
又代りてうるべし。生代ふうるめ。生代ま
わくの通人

半一　下口つうるうるの。前拵結うるうるを
俵と有て結めれ。半
半二　口後強をうるを。結郷書といのをの代
ばく。藤代有くく結四支
半三　舌代出てうるを。お若と横て出と
右よ押者て書を半
半四　跳るを右よ紀をうく。結書に細
条代有くく結四半
半五　お強のうるを。子人川と名付縄と
有大壁書第て強く代川て結四半

第六　毒虫噬トるるとき。毒虫をかくすべき事

第七　毒もりうるるとき。縄と鞭を用て。過過し。四方より柳と水くこうを煙
うるるとき。はくるべき事

第八　四方の鞭を縄と用て毒虫の縄
とはくべく引しめ。咽といるべく仕べし
もしてかの悪のうるるとき鞭下地をしか
とかの用べき者とくすべし

第九　かの馬又毒虫をうすうるあるへ
[illegible]の事はくべく潜べて仕べし

第十　毒入れわるるる。又人喰ひるるとべきと
焼て口の内へ入て咽とるる内にて
るる腸を外へくしんと歌事

第十一　背の毒へうるるとき。脇を結ぶ。二
ゆくう縫付よ結ぶ。陰の内
と縫切おくべく内に事

第十二　肛門のるるとき。糠と搗く墨う
ゆとうへくべく新く事

第十三　四方く血毒うるるとき。冷水おの湯う

廿十四　わくら暁まてひさしく人と閑事
　　尾とさうわるとだ。尾箱のさき人糠行
　　のとき式ものくくへ式わさらく支
廿十五　きるとは芸式稲くまさとんとく
　　人式閑事
　　おそ式うう式わけて書さうなりう
　　いろくなうけなる事どもとなりて馬式
　　痛悩のさしもる中なし。或河入れとと
　　わさるる物けるだ重くやるとてわらはた
　　く件の信掛式ものしるる中。そるの悩
　　日乃間よ死るだ。そるはうの夜悩方。は
　　中式悩出し。一日序悩やとさ出るのか
　　く。ま月式わくもう。はを延寛乃
　　時しる。表ま傷めしく或るる式寄て
　　傷るしけるだ竹の切口わうう。脇
　　寄破り膳くそるはく。南産よ死ま
　　中沢。それうり。十日わまり苦痛式
　　すて。絵よ死てるうはそとくく人毎
　　よるの出ひさくし輪のうと
　　とり

一 近代の人は都の人をうらやみ給へ
るといふものは代々にあり。そもそも十
三日人よりも先立てかうして。わ
ゝもしらぬ代引過せやくるる代
ゝとうして。さめ行わり。そもそ
侍るゝ人行うよ。鶯数とうけたしる
也。骨肉疎ゝとして。情愛のあるこ
と。乃代知人をそ代ゝ見る代ゝそ。
胸代ゝ思ひまゝ。ひとゝ行ゝ
ゝ行ゝとゝ人をそ代ゝ

中ゆく。世ゝうゝ世ゝ。物ゝ
をそ代ゝの中ゆゝ。ゝ代ゝ人ゝ
物ゝ行ゝ代ゝ。初鶯二の鶯ゝ
のゝゝ。ゝゝ。ゝゝ
いゝゝ。ゝ鶯のゝゝ
ゝ代ゝ。ゝ代ゝ
ゝゝ。ゝゝ
ゝゝ。ゝゝ

一 世の人とうふ。ゝ代ゝ
ゝ。ゝゝ。ゝ

かんん。我身のかるくて。魂のわるきかるを
ぢうらいして。ゐると歌うて。雲をあ
はとなす。鍛ト沈もの。稀くの
うちにて。寿ゐる人。志ある人。ときりて
死すること。わりまる。一生のゐる病ゐるとうて
ときるとわると。かくのごとく一世の内にて
しるべき人。ぜひとも。ものいさんを。
或年年
人のうちよりものかるは
ゐるうちにて。ものいはず

一
家人のむかふ式ちうのを
とうんゐるの美をよくみけりとて。いかへり
他人の作りまよりはけりとうを。
わるれよりもまるれ
一
或人のこしそ。ゐるをゐのん拾ちくしく
魂のいうちうんそ。そ歌もさうんかて
て濃き式ゐ方よりこそ。子孫繁栄かんん。
下ものをくと。腦し。痛労ちうとものふ。
とうくそ。をわくなちうるん根とうく知

又そのとき者ども多勝り。少し
利のうちなれども。その国窮して困
とうり。終よりそこんとをなげきて。
為とぐらの切りひて。家を。切りそこにとる
とうく。それと。ぐろ少人。我ともて。和合
よりて。困わるるそ困とうれ。世かるる
をいとこれのうん
一
八月わ。さるも。ぐろく。家ぐ。者わ
と。ちへ。もひり。平氏滅亡の後
より。門。後遠の法と。奥く。人よ。海ひ。星

よ。位をのり。は。ちよ。奥。歯く。刺とのる。手
をうぐ。わくい。歯ちへ。ざるのり。色。松の
切りて。要式。嚙べ。ふ。不。取こ。ちれども。腐
ちるそかり。けり。ぐ。或ハ。絶。歯と。ちる
のとい。必要とのれ。ぐ。あ。ぐ。わ。く
なるべ。ぐ。式。仕。く。を。ねぐ。大
概。ちるもの。
一
ちれ。為。式。切。ち。天和年中よりく。制禁
ちを。仕。ハ。ぬ。の。ち。武門の功と。
ちとゆへ。ん。為。ん。わりざる。聞。乃

世代なり。然るに其方乃
国まで。いまだ為切と止ざるとなり。
はじめ武湯へ引る時どもとんろふ階為切る
るどとも。こい物ごくい物分おどれ為替を
ごとく。武士なる為ようわらき
事なり。士の業忘れ
利器とりとるが如し。為切
と見へし。武士なる人。軍用
所業なりて。偽なく
ほうき事。

為器ぞ。ほうしきるの業ぞなりて歳ぞ
きこえすり事。ひとりなりとなるも
わるず。獣者なりと出ぞ。昔有作身。以
事の仕業なり。為切初なりそ。唐奥乃物
分の業。業ぞ物へ出しなり。中ほ長刀の
物分の業なり。文略なるなりきなる
なり代改めざる人よ。今時分よりもなりて
るの物なり。為切の所なる石切参
とおてなりなりなりなりなりなりなり人
はなりとなりなりなりなりなり。偽なる業ぞ

鼻ばしらの○さ先なるの面相にてよりあるを
ほうそかし

一　馬の首ばしらもとしてうまそ・ほうよりらくく
ひまづる倒なりのめく・おらう岩石海
岩細乃細指のごとく馬のひとうね
半なり・ほかとまくあ出しぬとで
馬の耳馬ばし引・らくうくして・前ほか
しゝ又ら指ほかもすらしたくぬ
とば・血ばらくうくうらし・或そ尾の馬ばし切
うらるい下腹ほかくく敵ようそ半わりま

て細指細乃ほかくかつとよるし・他ほ
ほと腹とほ悔ほまらうぬとば・まううどて
て・こうばと多し・尾のさ者のゆうれほか
らば・奥溝ほれ稱ほさげとし・
一　前馬脛馬尾馬と切く・ほとうとうく
尾とら○さ也脛ほくほそ・屋門ちと潮せ
るほううらけて・前んばうこで
しゝうほそ。俗よ前乃ばうとれて敵
乃ぐひよほうらうそ・武士ちうほうぐ
尾ちう。ちそ軍用の弟一ちうようく。力足

さて長つらく長くして、ふくさ紙をもつて菊切うるなり。ふくさ紙ハ、とうとう、こは海苔と申ようなものにてこゆるわりといふ。もとくへ、なを内よこゆるわりといふ。なをのりとなる。菊をもつて菊切うるの板をさしひきべし。まして菊切うるの板をしくべし。まして菊切うるの板をしくべし。まして菊切うるの板をしくべし。まして菊切うるの板をしくべし。

一 初知入さし入初の時、菊切うるを、忌紙ふ表のもつしまり、家中ものと、婚姻祝儀又ハ正月の家初の時、菊切うるの板をしくべ

一 神社仏閣の門あへ。菊切うるを家中わ。神仏を天地一体為所わ。忌忌中ふるを人ハ感ぜ家相具ハ上下のうる菊をわるべ。上輝のうるの菊とうるべ。ぶ出くわ。中輝の半とうるべ不輝となるべ。下輝の菊と切べ進ぜ申す。拍子のうるの菊とうるべ。拍子とうる。菊のうる菊式うるべ。蹴ぶ。拍子とうるの菊式うるべ。拍子とうるの

筋ばかりの切り口なるもの、又鳥の羽
とうとうだ。悔おくらん。常肉ばかりなるべし。
考るの筋とうるとうきはけうすきもの
して命絶るべし。ゆめゆめ切申まじ
筋ばかり切附ばかりわるくうるとうなる
とうる事とうとう眼とうんかし。最候ひらき
酒呑とうる。其分とうるめかうんかまこと
つうつかりして。顔倒同絶して苦しけるる
わりうまとうんるも打いきまし。或る目乃
まんまの精神とうしのひ。死とうるとわり。

前代按而舎と按附くるもわりと又
呑とうり頭倒るもわり。或ハ乳呑とうり
或る曲ばかりくとうるるもわりうてつう
て按附くるとうりとうとうしとも。
前代方角とう意呑前代瑞とうるもは
ばかりて。倒るもうもとうく。乳遅とうるひ。
眼とうハ。美なる洞とうるひ。さとううり
きるるわりうまるばかりうんとうとく出来
ようハ。ふのるとうは呑前ばかりくとうるひ。
そうんくの形でもうるとうよ化色わりとうん

つゞく。徴よはげしく情なきんぞといひ
とわきまへ。天府のあるのみよおかり
ミいんぞ。かしくしうくめしく。若し
ミ痛悩るもの。さぞ切ぬべしを思ひ我身
もさとりて志しいハ。人おもかん人饒か是ぞ
よろこびよのしまんや。未ぬ形状をいはそ。
是どもより庭をとほりて。わざすり乗州のこゝろ
半意なりし半先なり。然ハ天我わすり
神州なりしるの一系とそ人に繋ひ類をうけて。
蔵ものとべし修しすべし

今かくて又を続まかくにせより
筋ぞこうべかわきましきうれ
たの気れんぐくさ。よきひく利害をしていの
そのとふかくぐ。よある歌なり。けわきひ旨をにく
ろを眼よるハ。おとけさくとはりくとなれ
子姿をたへ倒もつきすんん。艦是端なしば
つまそのごとく。さこびゆるとかん運了こいはるへ
生端かぐしもせんとおへば。事をにげしかし
打病すふの身まで立べき。あるそおのまどが是かり。
是かくしてる捕るんとあさんとぞ。とむひもよう

ごとくなり。薬師の神像あり。まぬい抜けもあり。
ゐるとは世ごとのうと。若家ふるふる者へ行り。ちい
殺さるものとが是れ殺生切ていのの功ていある。
なるは者ちくいの人名目とそれうの為切
とそわるまーさく

一ゐの歯ゃ歯て。家代のんりくんちく。利
家とうして世間の若わり。天性ゃ聊くく
ちひ。人の眼と固くいひ。ゐるのちゃうし
ちくいひ。かどちそ尋のまんで。歯ゃ歯と
しゐるそれ陰ゃ人と悔く歯ん

手つくくくつと生くくちゃ。年そ
ゆとゐちふかどす。人も歯の毛伸ちとの
ちふりて。焼蒸徳かどゃけて。歯のけ
と薬法歯の円とも抜て。やうひ。ちし入家
歯の七家かどくちて。人の円ゃ固と手ゆり
ちゐどと抜へる歯ゆ人。内歯生のとと
ちくくみゆとと。奥歯を抜へちゆ
かどちのう。ちふりて。れ食内奥歯八会
とゐへども。向歯ちくくよ会ちよちた意
新藤とこぼして。歯生ちくくちゆ毎

一

よそ人とるにやぐさうめいくらいさうんを
世俗よ為の書式法囊の書と云。仮名城
小弁といひ世を八元の村と。よつじと身
下地のるとは一向のるといふり。他年文
青の家人或ものとて。物方ともと多く集く
とるを。後第毛廉もものるを。ものれば。
小弁つるさるる。法囊の書とうきを。
さといひで。を場の名をうれで。年は病あり
といふ。最所脱いう

論云

肥うるとく痩うるの徳を肥るある
法あり痩うるあり。ものれも一要の
法よりけて。肥痩の形よりざるけく

論云

ものうるとうるを人を脱の内
を物者あるべしとを物とつるを者は
を法よりて。を中にものを出来ものり
物家よいうりを。石二一要のて言ものは
和合を故よ。有力家にうを和

論云

あるひとくはるさんも。絶句の内にて甲乙
わろ。高妙よきうの。切磨琢磨をわたく。
半成玄句にあらざるぬ作にいろ少人る。有
知をわるに一ありてそこを一貫こ

論云

工夫と作とを。絶句を作るに。地形を
知とおもうてめくり。用地の出処を眼と活
志の遠さうと計こん

論云

作用の極意は一年の極意なり。一句
の地形をそ日の地形なり。一日地形
とさだしば一生の極意とうる。お人乃云。
一生の業を勤よわるこそ